

◆12月第3週のメッセージ

■日時：2020年12月20日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「幼子（おさなご）は、母マリアと共におられた。」

■聖書：新約マタイによる福音書2：1-12（新p12）

■讃美歌：267「ああベツレヘムよ」※1・4番。264「きよしこの夜」※1・3番。

お早うございます。

今日はクリスマス礼拝です。

主イエス・キリストのご降誕を、心から感謝し、その喜びを共に分かち合いたいと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大が止まない中でのクリスマス礼拝です。

世界ではすでに7,500万以上の方が罹患し、亡くなった方も165万人を超えました。

日本でも、感染者は19万を超え、死者も2,800人を超えました。

この世界を覆う暗闇の中で迎えるクリスマスです。

暗闇とは、第一に命が脅かされる感染への恐れがあります。

仕事を失い、家族を養うことが出来なくなる恐れがあります。

そして又、仕送りが途絶え、アルバイトも無くなり、学業を続けることの出来ない恐れもあります。昨日の「朝日新聞」朝刊によれば、コロナ禍の中、休学や退学に追い込まれた学生がすでに5,000人を超えたと報じられています。

そのような、多くの恐れの中でも、最も深刻なのは、私は住む場所を失うことだと思います。帰る場所が無いのです。今日一日を生きた疲れた身体を休める場所が与えられない、見つけ出すことが出来ない、これ以上の不安と絶望はないように思います。

それだけではありません。

例え、帰る場所があっても、そこに安らぎがない時、夫、妻、子どもたち、親との軋轢などによって、心の居場所を見つけられない時、人は家にいるよりも外に出て、行く当てもなく彷徨（さまよ）います。そのような人々の現実には私たちは直面しています。

この暗闇の中に、それでも主イエス・キリストはお生まれになりました。

闇が深ければ深いほど、キリストによって、私たちに届けられる救いの光はその輝きを増し加えます。どんなに暗闇が深くあろうとも、光は全てを明るく照らし出し、歩むべき道を教え、明日への生きる希望と力を与えます。

今日、その消息を、マタイが記した御言葉によって、改めてご一緒に学びたいと思います。

マタイによる福音書、第2章1節2節です。

1：イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、

2：言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。

不思議な場面です。

旧約の時代からメシア、即ち救い主の到来を待ち望んでいたのは、神様から選ばれた民とされていたイスラエル民族でした。彼らは、何十年も、何百年も待ち望み、いよいよその時が来たのです。

にもかかわらず、救い主の誕生の知らせをいち早く知ったのは、イスラエル民族ではなく東方の占星術の学者たち、即ち異邦人であるとマタイは記しています。そして又、イエス様の誕生物語を誰よりも詳しく記したルカも、その知らせを真っ先に聞いたのは、ユダヤ社会で最も底辺に生活の場を置き、疎外された民であった羊飼いたちであると記しています。

主イエス・キリストの誕生、それを真っ先に知らされた人々、それは、マタイは異邦人であり、ルカは疎外された人々であると記しました。

これら二人の福音書記者は、キリストによる救いの喜びは、社会の中心にいる人々ではなく、社会から疎外され、追いやられた人々、選ばれた民ではなく異邦人に、即ち、絶望のただ中にあり、救いを最も切実に待ち望んでいる人々にこそ告げ知らされたと言うのです。

3 節です。

3：これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。

ヘロデが不安を抱いたのは、学者たちが「ユダヤ人の王」が生まれたことをヘロデに知らせたことにより、自分の地位が脅かされるのを恐れたからです。そして、王の不安は、人々にも伝わり、民心も又動揺しました。

4 節から 6 節です。

4：王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。

5：彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。」

6：『ユダの地、ベツレヘムよ、』

お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

この預言の言葉は、旧約聖書のミカ書（5:1-3）とサムエル記下（5:2）とに出て来ます。

民の祭司長たちや律法学者たちとは、当時のユダヤ社会の最高指導者たちです。彼らは、メシアの到来を預言する旧約聖書の言葉を知ってはいたものの、それが何を意味しているかを知ることはありませんでした。

7 節、8 節です。

7：そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。

8：そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

自分の地位を脅かすものであれば、誰であれ、たとえ幼子（おさなご）であれ、全て取り除くと言うヘロデの残忍な性格を表す言葉です。ヘロデは、すでに、イエス様を殺す殺意を抱いていました。

9 節から 11 節です。

9：彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。

10：学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

11：家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

今日のメッセージのタイトルはこの 11 節から選びました。「幼子は、母マリアと共におられた。」母マリアは、出産が時間の問題となっている時でも、生む場所を夫と共に探し続けなければなりませんでした。長い旅を経て、身重の身体を抱えて疲れ切っていたにもかかわらず、生む場所が無いのです。居場所が無いのです。マリアの不安と恐れがどれほどのものであったかと思います。マリアと生まれて来る子の命に関わることを知っていたヨセフは、必死になって泊まる宿を探したと思います。彼が宿屋の戸を叩く音は、次第に、強く、激しくなっていたと思うのです。

にもかかわらず、見つかりませんでした。無理ありません。住民登録のために、皆長い旅を続け、等しく疲れていました。そのような人々で、宿屋は溢れていたからで

す。しかし、ヨセフの必死の形相を見て、身重のマリアを見て、家畜を飼っている場所でも良いならと受け入れてくれた主人の言葉に救われ、マリアは幼子を生む場所を得ました。

イエス様が寝かされたのは、動物たちが餌を食む堅い飼葉桶の中でした。柔らかな布団とはほど遠い飼葉桶です。マリアも又、家畜の餌となる干し草の中に身を横たえていたの

でしょうか。

しかし、そのような、想像を超える劣悪な環境の中にあっても、幼子は、母マリアに抱かれました。そして、この時、2人には何にも増して、安らぎに満ちた平和な時が訪れます。

マリアと幼子をめぐり環境、それはまさに暗闇のただ中です。

しかし、イエス様がお生まれになった時、そして、母マリアに抱かれた時、2人には、不安と恐れの間を突き破って、喜びと平和の時が訪れました。その喜びは、ヨセフも、3人の博士らをも包みます。

そして、マタイがここで記しているこの消息は、今、コロナ禍の中にある私たちに語りかけます。どれだけ闇が深く、恐れが私たちに覆っていても、救い主は確かに私たちに与えられたのだと。そして又、私たちは、母マリアに抱かれている主イエス・キリストを心の内にしっかりと迎え入れたいと思います。そうして、心の内に確かな希望の灯を灯し、明日に向かいたいと思うのです。

最後の12節です。

12：ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

この箇所が続いて、13節以下では、ヨセフがマリアとイエスを連れてエジプトへ逃げ、さらに16節以下では、ヘロデによる2歳以下の子どもたち全てが殺される話が続きます。マタイは、祝福に満ちた主イエス・キリストの誕生と同時に、子を失った母親たちの嘆きと悲しみを記しました。

主イエス・キリストの誕生、それは、私たちにとって二つの意味を持っています。それは、別々のことではなく、一つの事柄の表と裏とでも言えると思います。

一つの意味。それは、心の暗闇に、光が与えられることです。イエス様によって、悲しみは慰められました。病は、癒やされました。心の乱れに平和が与えられました。そして、明日を生きる仄かな希望が与えられました。

しかし、もう一つの意味、それは、イエス様の誕生によって、心の暗闇がますます深くなることです。ヘロデがそうでした。イエス様に対する悪意は、幼児虐殺にまでその激しさを増しました。祭司長や律法学者たちの罪も同じです。自分たちが胡坐をかいていた権威が損なわれ、その地位が脅かされた時、イエス様の命を奪うことを決意します。12使徒の一人であるユダも同じです。イエス様への自分勝手な期待が裏切られたと思いこんだ時、銀貨 30 枚で敵へ売り渡しました。

マタイは、このようにして、主イエス・キリストの誕生を、その周囲に生起する世の現実を明らかにすることによって記します。そして、キリストの生涯は、人々に救いと喜びをも

たらすだけでなく、同時に、世の悪を呼び起こし、明らかにするものでもあったことを私たちに知らせるのです。

イエス様の誕生は、心から救い主の訪れを待ち望む人々にとって、これ以上の喜びはありません。どれほど自分を覆う闇が今は深くても、必ず一筋の光となって私たちを導き、生きる道を照らして下さるからです。

一方、ヘロデのように暗闇に留まる人々にとっては、ますますその闇を深くするものでもあるのです。光を求めるのか、闇に留まるのかを、マタイは私たちに問うています。

そして、私たちこそ、御子イエス・キリストのご降誕を心から待ち望む民であることを、神様は御存知です。

クリスマス、主の誕生に栄光あれ。

主は共におられます。

祈りましょう。

2020年12月21日（月）

立川教会牧師飯島 信